様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１１６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２５５７

研究課題名（和文）福島県相双方言の記録と継承を目的とした調査研究

研究課題名（英文）Surveillance study aimed at recording and inheriting Soma and Futaba dialects

研究代表者
半沢　康（HANZAWA, Yasusi）

福島大学・人間発達文化学類・教授

研究者番号：１０２５４８２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，[1]東日本大震災の被災地である福島県相双地方の方言を記録・保存するために，可能な限り多数の方言データを収集し，相双方言の基礎的，総合的な記述を進めるとともに，[2]被災地域の地域復興と方言継承に資するため，被災地小中学校の授業で活用しうる方言学習プログラムの策定を目指すことを目的とする。
研究期間中に，[1]相双地方の避難指示が解除された地域を訪れ，方言の自然談話を多数収集した。[2]またこの資料を活用し，被災自治体の教育委員会とも連携を図りながら相双地方の子供たちが地域方言について学ぶための学習プログラムを策定した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
東日本大震災と東京電力原発事故により，福島県相双地方の多くの自治体では，地域コミュニティの存立自体が危ぶまれ，同時にその方言についても急速な衰退が懸念される。本研究では危機的な状況に陥った相双方言を可能な限り記録し，後世に継承する手立てを考えた。加えて，方言調査を企画して学生らとともに避難指示解除地域を訪問することは，当該地域の交流人口拡大につながり，さらに震災以降旧知の方々との交流の機会が減ってしまった高齢の方々の傾聴支援ともなりうる。本研究は，このように方言データの収集活動自体を，被災地支援の一助として位置づけることをも企図したものである。

研究成果の概要（英文）：This study aims to collect as many dialect data as possible in order to record and preserve the dialects of the Soma and Futaba district in Fukushima Prefecture, which was affected by the Great East Japan Earthquake.It aims to create a basic and comprehensive description of the Soma and Futaba dialect.
The purpose of this study is also to develop a dialect learning program for elementary and junior high schools in the affected areas.
During the study period, we visited the area where the evacuation order was lifted in Soma and Futaba district, and collected many natural discourse in dialect. Using these materials, we developed a learning program for children in the Soma and Futaba district to learn about regional dialects in cooperation with the education boards of the affected municipalities.

研究分野：方言学

キーワード：東日本大震災　方言談話収集　記述的研究　方言教育実践　被災地支援

1.研究開始当初の背景

周知のとおり，東日本大震災は福島県にも甚大な被害をもたらした。研究開始当初の 2015 年においてもなお，12 万人以上の方々が県内外で不便な避難生活を余儀なくされていた。とりわけ東京電力原発事故によって避難を強いられた相双地方の自治体は，当時，帰還の見通しが立っていないところも多く，地域コミュニティの存立自体が危ぶまれ，同時にその方言についても急速な衰退が懸念されるところであった。避難指示が解除され，住民帰還が始まった地域でも，高年層を中心に自宅へ戻る方が見受けられるようになった一方で，なお様々な原因で(とりわけ若い世代の)帰還が進まず，地域における方言の継承という点では他の避難区域と同様の問題を抱えていた。もともと共通語化の影響で変容しつつあった相双方言ではあるがこの震災を機に危機的な状況に陥りつつあった。

東日本大震災の被災地においてどのような方言研究がなされているか，東北大学方言研究センター(2012)には被災 5 県の方言研究論文(含書籍)リストが掲載されており，それによれば福島県の相双地方，特に双葉郡の方言については，言語地理学的調査やグロットグラム調査など方言分布，言語変化に関する研究は一定存在するものの，伝統的な方言の様相を精緻に記述した研究はほとんど行われていない状況にあった。上記のような方言の危機的状況を考慮した場合，当該地方の伝統方言に関する基礎的な資料収集と記述研究が喫緊の課題となっていた(小林隆ほか 2012)。

こうした状況に鑑み，本研究の研究代表者は，2012 年度以降，文化庁からの事業委託を受け，福島県内被災地の方言談話資料を収集する調査に取り組んできた(福島大学国語学研究室 2014 ほか)。しかしながら被災地が広域に及ぶため，すべての地域の方言について十分な量の方言談話資料を収集するには至らず，さらなる調査の継続が必要であると感じていたところであった。

2.研究の目的

1.のような背景のもと，本研究では以下の 2 点を目的に設定した。

[1]東日本大震災の影響で地域コミュニティの維持に困難が生じている福島県相双地方(相馬，双葉地方)方言の記録・保存に向けて，可能な限り多数の方言談話資料を収集する。またその資料をもとに当該方言の基礎的，総合的な記述を進める。

[2]上記資料のアーカイブ化を進めるとともに，被災地域の地域復興と方言継承に資する方言資料の活用方策を検討する。具体的には被災地小中学校の授業で活用しうる方言学習プログラムの策定を目指す。

3.研究の方法

2.の目的達成に向け，以下について計画した。

[1]相双地方の方々が避難されている県内各地の仮設住宅等を訪問し，方言の自然談話収集のための調査を行う。調査は関与型傍受法によって行う。複数のインフォーマントに様々な話題について自由にお話しいただき，その音声を収録する。その資料をもとに，適宜補充調査を行いながら相双方言の分析・記述作業を進める。

[2]また[1]の資料を活用し，被災自治体の教育委員会とも連携を図りながら相双地方の子供たちが地域方言について学ぶための学習プログラムを策定する。

4.研究成果

2.に示した目的[1]について。本研究を開始した 2015 年度以降，避難指示の出された地域において，指示の解除が進み，住民の帰還が始まった。とはいえ，避難指示が解除されても，当然のことながら一斉に帰還が進むというものではない。自治体全体が避難したため，病院や金融機関などの生活インフラが整わず，また，避難の長期化によってすでに新たな生活基盤が別の地域で形成されてしまっているという事情もある。

こうした背景のもと，住民帰還の呼び水としてまずは地域の交流人口拡大に向けた教育旅行誘致等を目指すという地元の計画が示された。この地域ニーズを踏まえ，2016 年度以降は避難指示が解除された自治体(川内村，田村市都路地区，広野町，楢葉町等)を訪問し，方言談話収集の調査を実施した。これは，被災地の方言データを収集すると同時に，活動自体を被災地支援の一助に位置づけることをも企図したものである。

調査によって多数の方言資料を収集することができたが，被災地域は広範囲におよび，データはなお十分とは言い難い。2019 年度からあらたに継続課題について科研費の助成を受け，調査を継続しているところである。

目的[2]については，現職の福島県小学校教員である研究協力者の助力を受け，避難指示区域のひとつである，南相馬市小高中学校において方言教育実践を行った。この実践は本研究開始以前に，福島市内の小学校で予備的に実施した方言教育実践を発展させたものである。上記の「避難指示解除地域における方言調査活動」とともに，その成果をそれぞれ研究論文としてまとめ，現在刊行に向けて準備を進めている。

5.主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 13 件)

[1] 本多真史 2019「福島県田村郡小野町及びその周辺地域における言語伝播の諸相」『言文』66,pp.4-13，査読無

[2] 半沢康 2018「東北地方におけるハーの伝播と変化」『方言の研究』4,pp.159-180，依頼論文

[3] 半沢康 2018「現代における方言語彙の動態」『シリーズ日本語の語彙 第 8 巻 方言の語彙―日本語を彩る地域語の世界―』朝倉書店,pp.132-147，依頼論文

[4] 半沢康 2018「福島県檜枝岐方言の現状―その独自性と変容―」『日本語学』37-7,pp.2-10，依頼論文

[5] 半沢康 2018「要地方言の活用体系記述　福島県福島市方言」『全国方言文法辞典資料集 4　活用体系 3』方言文法研究会,pp.29-39，依頼論文

[6] 白岩広行 2018「方言だから伝わることを考えて」『新しい地域文化研究の可能性を求めて』3,pp.54-64，査読無

[7] 白岩広行 2018「福島方言の表記法を考える」『立正大学國語國文』56,pp.1-13，査読無

[8] 白岩広行 2018「7 時間の談話資料からわかること―福島県伊達市方言の受身関連表現―」『立正大学文学部論叢』141,pp.137-152，査読無

[9] 武田拓 2018「要地方言の活用体系記述　宮城県仙台市方言」『全国方言文法辞典資料集 4　活用体系 3』方言文法研究会,pp.17-28，依頼論文

[10] 白岩広行 2017「方言記述のためにできること―震災後の福島から―」『ことばとくらし』29,pp.102-104，査読無

[11] Fumio Inoue & Yasushi Hanzawa,2017,Observation of Linguistic Change in Progress Through Real Time Comparison of Glottogram Data,*VIII. Congress of the International Society for Dialectology and Geolinguistics*,pp.31-43，査読無

[12] 半沢康 2017「グロットグラム調査データの実時間比較」『空間と時間の中の方言』朝倉書店,pp.283-303，査読無

[13] 小林初夫・半沢康 2015「地域の人々の方言に寄せる思い―福島県被災地方言の継承に向けた取り組み―」『方言を伝える－3.11 東日本大震災被災地における取り組み－』ひつじ書房,pp.23-60，査読無

〔学会発表〕(計 12 件)

[1] 半沢康,「福島・宮城・山形方言の経年比較調査―多人数・グロットグラム・分布・通信―」,LAS 科研ミーティング(広島県立大学サテライトキャンパスひろしま，広島市),2019.3.3

[2] Yasushi Hanzawa,Diffusion and Change of r-deletion in Fukushima prefecture,The 16th Annual Conference of the International Association of Urban Language Studies(Oita University,Oita),2018.9.11

[3] Fumio Inoue&Yasushi Hanzawa,Dialect vocabulary changes over 140 years―Standardization and new dialect forms observed in Hamaogi glossary,9th Congress of the International Society for Dialectology and Geolinguistics(Institute of the Lithuanian Language,Vilnius),2018.7.25

[4] 白岩広行,「福島方言の記述の概況と指示詞・代名詞調査報告」,「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」，第 2 回研究発表会(国語研究所，立川市),2018.3.11

[5] 半沢康・本多真史,「方言調査を介した被災地支援―避難指示解除地域における取り組み―」,第 1 回実践方言研究会(金沢大学，金沢市),2017.11.11

[6] IWAKI Hiroyuki&TAKEDA Taku,Use consciousness of Mandarin and Taiwanese in Taiwan -comparing with consciousness of standard Japanese and dialects in Fukushima, Japan-,The 15th Annual Conference of the International Association of Urban Language Studies(University of

Macau,Macau),2017.10.15

[7] 白岩広行,「福島から考える方言記述の意義と方法」,平成 29 年度立正大学人文科学研究所新任教員発表会(立正大学，東京),2017.7.26

[8] 白岩広行,「日常のことばを分析する－方言研究の立場から－」,平成 29 年度立正大学國語國文学会前期大会(立正大学，東京),2017.6.22

[9] 小林初夫・半沢康,「東日本大震災被災地における方言教育の取り組み」,日本方言研究会第 104 回研究発表大会(関西大学，吹田市),2017.5.12

[10] 白岩広行,「方言記述のためにできること―震災後の福島から―」,平成 28 年度新潟県ことばの会,2016.11.19

[11] 半沢康,「シンポジウム　方言を介した支援活動」(司会),日本方言研究会第 103 回研究発表大会(山形文教大学，山形市),2016.10.28

[12] Fumio Inoue&Yasushi Hanzawa,Observation of linguistic change in progress through real time comparison of glottogram data,8th Congress of the International Society for Dialectology and Geolinguistics(Eastern Mediterranean University,Famagusta),2015.9.15

〔図書〕(計 1 件)

[1] 真田信治・友定賢治編，武田拓，白岩広行ほか 2018『県別方言感覚表現辞典』東京堂出版,pp.1-354(宮城県，福島県担当)

〔産業財産権〕
○出願状況(計 0 件)

○取得状況(計 0 件)

〔その他〕
ホームページ等
http://www.ipc.fukushima-u.ac.jp/~p002

6.研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：白岩　広行
ローマ字氏名：SHIRAIWA,hiroyuki
所属研究機関名：立正大学
部局名：文学部
職名：専任講師
研究者番号(8 桁)：30625025

研究分担者氏名：武田　拓
ローマ字氏名：TAKEDA,taku
所属研究機関名：仙台高等専門学校
部局名：総合工学科
職名：教授
研究者番号(8 桁)：20290695

研究分担者氏名：本多　真史
ローマ字氏名：HONTA,masahito
所属研究機関名：奥羽大学
部局名：歯学部

職名：講師

研究者番号(8 **桁**)**：**70806158

(2)**研究協力者**

研究協力者氏名：小林　初夫

ローマ字氏名：KOBAYASHI,hatsuo

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。